

2013.7.9 (火) 社会学部チャペル

「日常から『世界市民』として生きる」

阿部 潔 社会学部教授

「世界市民」という言葉を聞くと、国際共通語である英語を流暢にしゃべり、世界で活躍し、国際的な人脈を豊かに持っている人たち——具体的に言うと、最近話題のネットプレゼンテーション・イベント (TED) などに登場する各界の有名人たち——の姿が浮かびあがるかしもれません。この「世界市民」という言葉を聞いて、人々がイメージする「世界」とは、具体的にどこなのでしょう。例えば、ビジネスの最先端であるアメリカ・ニューヨークで金融機関に勤め、日々の為替市場の動向に神経を尖らせながら華やかに働く人たちにとって、「世界」とは文字通りに「グローバル」な広がりを見せていることでしょうか。では「世界市民」というときの「市民」とは、いったいだれなのでしょう。ここでの「市民」とは「市民社会=civil society」の構成員である「市民」だと思われます。もう少し分かりやすく言えば、王様や将軍と言った権威に従属して暮らすのではなく、「自分たち」ひとり一人が社会の主役となって自らの手で治めていく。そうした人々をここで「市民」と言います。他律ではなく自律を旨として、自らが主体となって「世界」と関わる。権威や権力に屈することなく、世界それ自体の担い手として、さまざまな領域で活躍する。そうした自負と気概が「世界市民」という言葉には込められているのです。

ですが、私自身はそこにどこかしら「空々しさ」を禁じ得ません。その理由は、世間で喧伝される「世界市民」の話や、それを具現している人々の姿を目にしたとき、そのリアリティを実感しづらいからです。要するに、自分自身が日々生きている現実とかけ離れているのです。

突然ですが、ひとつ質問をさせてください。皆さんは地元のスーパーでブロッコリーが一株いくらで売られているか、ご存知ですか。その値段が最近上がっているのか下がっているか、ご存知ですか。毎週決まった日に「おっちゃん」たちが自転車の荷台にぎっしり詰めて運んでいる廃品のアルミ缶が一キロ当たり幾らで売買されているか、ご存知ですか。「世界市民」としてこれから活躍しようと意気込む若者たちは、こうした日常において「生きる」ことについて、どのくらい知っているのでしょうか。そもそも知る必要性を感じているのでしょうか。もしかすると、自分の関心や目が「国」や「世界」にばかり向かってしまうと、もっともらしく「デフレターゲット」や「東アジアの安全保障」といった言葉を操ることに浮かれて、自らが日々暮らしている「社会」についてのリアルな感覚が失われてしまうのかもしれない。「一国の市民」にしてそうなのだから、より広い視野が奨励される「世界市民」にとって、そうした日常生活とのギャップやズレが生じることは、ある意味で致し方ないのかもしれない。

ですが私自身は、大学教育の末端に関わる者として若い人たちに「世界市民」という言葉

やイメージに浮かれて、いきなり「世界」や「市民」を目指すのではなく、しっかりと地に足のついた場所から、自分自身の感覚と実感を大切に物事を考えていく術を身につけて欲しいと望みます。私たちが目指すべき「世界市民として生きる」とは、カッコ良く人前で活躍したり、世間やメディアの脚光を浴びることではなく、日々経験される他者との関わり合いの中で物事を感じ、考え、そこから「世界」へと繋がる道筋を地道に見つけ出すことではないでしょうか。どのような道筋があるのか、どうすればそれはグローバルな世界へと通じるのか。それは誰にも分かりません。だからこそ、真摯に日常を「生きる」ことが求められるのです。それはきっと現代に暮らす私たちひとり一人に課された「使命=ミッション」なのだと思います。

最後に、「今のこの世の中において生きる」ことの意味を考えるうえで希望と勇気を与えてくれた Asian Dub Foundation の “Committed to Life” の一節をひいて、今日の話を終えたく思います。

I guess part of me or a part of who I am, a part of what I do is being a warrior - a reluctant warrior, a reluctant struggler. But... I do it because I'm committed to life. We can't avoid it, we can't run away from it because to do that is to be... cowardice. To do that is to be subservient... to devils, subservient to evil and so that the only way to live on this planet with any human dignity at the moment is to struggle.